

のうせんぎよ（北淡町室津）

「のうせんぎよやこというても今どきの子は知っとるかのう。」
そう言いながらしょうぎに腰をかけた八十すぎのおばあさんが語り始めました。

淡路という所は大体狸話が多いけど、室津にはそりゃきつねが多かったんだ。ようけおったぞ。ほれでじつきに人をばかすんだ。きつねにばかされたと言ってもほんまにしてくれへんかも知らんけどな。たとえばだよ、夜よそでよばれて、いんによつたら、じゅう箱の中のごつお（ごちそう）を食べてしても中へ牛のくそや、わらんじのちびくそ（わらんじの切れかけ）を入れとくんや。・・・はあはあ、ふるしきの中のをな。まあまあわしの言うことをしまいまで聞いてみい。ほんまにあったこつちやぞ。

うちは今でも漁師やけど、わしのこんまい（小さい）時、わしのおとつあんが朝いつものように沖へ出て行ったんだ。何せえびこぎ（えび取り）をせんなんから、そうやな四時頃起きていくんや。

えびこぎがすんだ頃、おとつあんは急に目をむいて口から泡ふいてのう、熱が出てったんや。ほれで、いっしょに行きよつたおっさんが船もどしてきたんや。お医者さんはじつきに（すぐに）来てくれたけど、みようやなあ。おとつあんは、おぶとん（上にかけるふとん）かぶって顔出せへんのじゃ。ふとんの中から、

「あぶらげ買ってこい。てんぶら買ってこい。」

とどなって買って来たら食べるわ。食べるわ。そうしよつたら、おっかあん（お母さん）が、「こりゃじんぐり（神宮）さんの前通っていきよつてきつねがついたんだ。病気違うぞ、早よう幸七つあんを呼んでこいや。きつねを落してもらわにゃあかん。」

ああ、きつねがついたんかとみんな笑いよつたら、目を引きつらしてほら顔もきつねみたいになって、

「こらおどんぎ（お前たち）、何笑いよるんじゃ。何がおかしいのじゃ。」

と、ようけ怒つてのう。それでみんな首をすっこめて黙つてもたところへ、幸七つあんが来て、

「こらじんぐりのきつね。あばれらんと早よいね（帰れ）。ぐずぐずしよつたら首をちよんぎるぞ。」

そう言うて刀抜くんじゃ。幸七つあんもきつねをいなそ（帰らせよう）と力入れてのう。そないいうて拝みよつたら、おとつあんが急にふとんをはねのけて外へ走り出すんじゃ。みんなあつばら（ポカんとした）顔をしてのう。おとつあんをじつと見よつたら、戸の口でベタッと倒れてしまうんで、見にいたらげしとつかれ（けがをしていない）よ。

「わんざ（お前ら）何しよんのか。大ぜいよつてたかつて。」

きよとなげな（妙な）顔して家へあがって、またぐうすこ（ぐうぐう）とねるんじゃ、きつねにばかされるというたら、ほんまにみよやなこつちや。それから、そうそう室津（むろづ）から遠田（とのだ）へ魚を売りに行きよる人も一べんばかされてのう。これは、あめだき（地名）のところに、こえつぽが昔あった時のこつちや。今頃はこえつぽやこといらんさかい、ないよになつとるけど。

その日、よさ（夜）戻ってくる時間になつてもけえへんから（来ないから）みんなようけ探したんや、へたら（そうしたら）、あのこえつぽの中でばぼのついた、てのごい（手ぬぐい）を頭の上ののせて歌を歌いよるんじゃ、びっくりするやら、おかしいやら、ほんで言うことふるとんだらう。

「ええ温泉じゃ。ぬくいわい。ああ、ええあんばいじゃ。」

こりゃいかん、きつねにばかされているとまた幸七つあん呼んで拝（おが）んでもろたら、そのじいはびっくりしてとびあがって、

「くさい、くさい、ああくさい。」

というてあわてて体洗つたということじゃ。それでもにおいがなかなかとれいでのう。

そやから幸七つあんを先頭に、のうせんぎよにみないつとつたんじゃ、寒なつて食べ物ないよになつたら、浜の子が三十人も四十人も幸七つあんについていて、

「せんぎよ、せんぎよ、のうせんぎよ。せんぎよ、せんぎよ、のうせんぎよ。」

と大けな声でカーぱいよぼりもつて（叫びながら）、きつねの好きなごつおを持って、きつねの巣のところに置いてくるんじゃ。みな寒いよつて着物をきてふところにして首にてのごい巻いてよぼんのじゃ。その中にや鼻が出てくる子もおる。その時や、着物の袖の先で鼻をつるんとこすつてふくんや。そやから袖の先は鼻でこべつて（くつつく）カチンカチンになつとる。

一番にこんびらはんへいて、次はあたごはんへいて、その次や山の明神、こりゃ遠いぞ、ほしておとろしいとこじゃ。しまいに大森はんへと皆びつぱらびつぱらとごつお振りまわしもつていくんじゃ。あんだけおつたきつねはこの頃みらんけど、どこへいつてもたのだんろか。ほれにこの頃きつねにばかされたやいうこと聞かん。なへだろか（なぜだろか）。

